特240
668

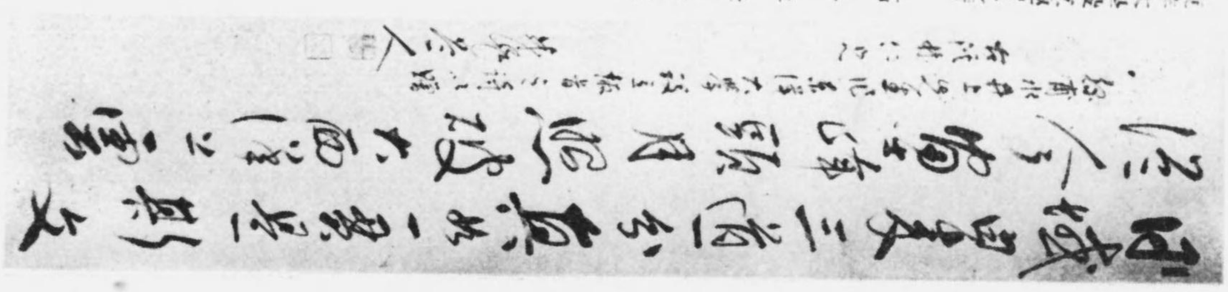
渓小篇　第五

日本の道の歌

古渓歌會

343
474

始



#240
668

緒言

詩は文の一種である。であるから、詩にはすぢみちがなければならぬといふ。詩が散漫になれば文になるわけであり、文が飾りすぎると詩臭くなるわけである。詩と文とは、相交渉し、相因縁しかもお互に守る範圍があつて相犯さぬといふのである。

處で、どの位、詩が文に近づけられるか、文が詩に近づけられるか、それを實際に、私の仕事に於いて試みて見たいと思つたのが、此の作品である。詩であると同時に散文であるといふつもりなのだが、出來上つて、諸君の眼前に出されたものは、恐らく、ただの散文に過ぎないのではないかと思ふ。

しかし、音樂的、詩的方面について、作者自身は、多少、或は相當に、力を加へたのであると、御承知置あつて、大きな聲で、どなつて見て頂きたいと思ふ。さうすれば、作者の氣分、心持だけはわかるはずです。

或は、歌ふ散文とでもいふべきでせう。高らかに、朗かに、大に歌つて下さい。そして、中味にある思想を十分味つて、十分、宣傳して貰ひたいと思ふ。

或は、古溪の宗教、信仰の聲ともいひ得ませう。切に共鳴の多からんことを希望するのである。

昭和七年一月四日

東京　四時佳興樓主人　古溪　林　節

日本の道の歌　目次

口繪　甫水先生詩　米峰先生書
一、日本だ
二、諸君
三、原始人
四、第三者
五、選民
追歌

日本の道の歌

一、日本だ

日本だ。
明るく淨く正しき日本だ。

日本だ。
神代この方、けがされざる日本だ。

日本だ。
日本の日本だ。

日本だ。
日本は日本の事を行ふのだ。

日本だ。
人類文明の中心だ。
その根柢だ。
世界の一切の生きものの、指導者だ、創造者だ。

日本は
日本のためにある。第一に。
日本人のためにある。第二に。
世界のためにある。
宇宙のためにある。
一切の生きもののためにある。第三。
これが日本だ。

光と熱と　慈悲と力と
いつも新なる生命。
これが日本だ。

日本の日本だ。
世界の日本だ。
宇宙の日本だ。

さうではない、
宇宙を創造する日本だ。
世界を立派なものにしようとつとめてる日本だ。
淨き極樂を實現させようとしてをる日本だ。

氣兼がいるか、

遠慮がいるか。
善事をするには、師匠にも譲らぬ。

正しい道、
大きな道、
廣い道の、平らなみち。

大手を揮つて、
　ゆけ、ゆけ、ゆけ。

日本だ。
日本人だ。
日本の道だ。
世界の淨化だ。

ゆけ、ゆけ、ゆけ。

日本がなければ世界はつぶれる。

雲

雲がゆく
どこへゆく。

北へ
東へ

はてもなや　吾が心。

どこからどこへ
はてもなや。

二、諸　　君

諸　君

正月だ、春だ、などと、酒を飲んでる時節ではないぞ、麻雀なぞに、日をくらし夜をあかしてる時節ではないぞ、しつかりしろ、人の道を慎め。

諸　君

諸君は、どこの國民だ。遠慮なく、すぐと、でかい聲で、日本人だといへる樣になれ。

諸　君

御近所への體裁で三度のめしはたべるのか。見せびらかしに衣物をきるか。人がやるからおれもやる商賣か。世間なみだから仕方なしにゆく雪隱か。寒い晩だ、やめたらよかろ。

諸　君

「自分」といふことを考へたか。親か、子か、夫か、妻か。捨子か、拾ひ子か、村人(ムラビト)か、町人(マチビト)か。おとなり御近所もあるだらう。母方お里もあるだらう。どうすりやよいか、せねばならぬか。若しも自分が逃出したら、地球の動きがとまるだらう。太陽系もつぶれやう。さうよ、一切みんながつとめあひ、力の出しあひ、はげみあひ、情のかけあひ、なぐさめあひ。

諸　君

トップを切るのだ。同時に後押だ。歩調を揃へろ。神だ、佛だ。日本人だ。大和魂だ。我等のつとめだ。隱居じやないぞ。修養だ、向上だ、絶えざる發展だ。正しい日本と一つになるのだ。

日本は日本の道を行ふのだ。

諸　君

花がさけば實がなる。夏の草が枯れれば冬の草が茂る。咲いてすぐ枯れる草、百年たつても花のさかぬ木。若いものが死んで、年よりが殘る。酒のみの子は馬鹿が多く、下戸は倉を立てたことがない。蛇はみぢかくて、みみずは長い。髮の毛はやはらかい、脛の毛はこはい。

諸　君

ひとの嬶はきれいでも、足袋のつぎなどしてくれぬ。餘處のお金は幾度勘定しなほしても、おれの使へるものでなし。幾らおかかと談合しても、只でもうかる方はない。麥は穗が出る、菜は花盛り。蒔いときや芽が出る。雨が降りやぬれる。

諸　君

雨は天から降るのでない。草の根ひいたら、すぐわかる。地から湧く、風がよせる、雲が來る。それで漸う雨となる。一人ぢや出來ない。みんなの仕事だ。馳(カケ)るのは脚だ。手をしばつたら走れまい。くさみをするのは、はなだけか。蚊に食はれれば、からだ中が感じる。きずからは血が出る。からだ中の血だ。

諸　君

思へ諸君。我が身、いやしといへども、この全地球に關係がある。思へ諸君、わがこの小さなからだ、實に宇宙を左右するのである。

さて、諸君、すべてが統一される時、彼と是と一つになるとき、始めて、物が生き、仕事が出來る。我に統一があるか、統一我にあるか。吾がちゐと行とは如何。我が家庭に統一あるか。我が町

村に統一あるか。我が國家は如何。統一と統一されるものと、我と彼と、彼と我と。

諸　君

秩序がなければ統一もない。先頭だ、後押だ、横隊行進だ。雨をふらせるのだ。音樂だ。雜音ではない。諸調音をひびきあはせるのだ。またぐらくぐる空氣を鼻に吸ふな。そつとぢべたへぬけさせろ。

諸　君

神代このかたの日本だ、われらだ。今ぢや世界の中心、人のみちびき。親より傳へた信仰、力。天地にいのちをみたせろ、與へろ。

諸　君

我等は宇宙人だ。世界人だ。日本人だ。天地開闢以來の日本人だ。我等の祖國は日本である。日本を愛する。日本を護る。いな、日本と一つになるのだ。

日本だ。
我等の日本だ。（おれが日本なのだ。）
日本の日本だ。
日本は日本の道を正しく行ふのだ。
日本は日本のつとめを側目ふらずにつとめるのだ。
これが日本だ。

わが大君　安らにいませ　度會の　みもすそ川の　すまむかぎりを。
大君は　神にいましけり　かがやきの　いつのかがやき　山に川にみつ。
大空の　光りこの世の　物みなの　いのちとなれり　大御稜威　あな。
あめつちは　かくぞ榮ゆる　神ながら　わが大君は　かくぞ榮ゆる。
み民われ　生けるしるしに　大君の　御代はたたへな　みさかえたたへな。

三、原始人

文化人と原始人とは、どうちがふか。思想のはたらき方、考へ方がちがつてる。たとへば東洋人と西洋人との、思想運用の次第方法がちがつてをるがごとくである。

文化人は、自他の區別を忘じ得る。原始人は自を知らないで、他ばかり見る。他ばかり見てゐるから、喧嘩爭鬪、慘虐無道。他にさからひ、他といぢめあふ。阿修羅の生活。それとはかはつて、自他の融合一如が出來るなら、平和、博愛、慈悲が行はれる。一切衆生悉有佛性となる。我は即ち彼。個性即ち普遍なる全の性。自我を撥無せずに、大我と合體する。

原始人が、自分といふことに氣がついた時、いかに他との爭鬪を猛烈にしたことであらう。白人を見ればわかる、赤人を見ればわかる。黄人を見ればわかる。利己と排他と、我利とさうして夜郎自大。それで、おどかされれば、すぐへこたれる。文化人は、すなはち然らず。

彼等、自あつて他なし、個ありて全なし、獨ありて衆なし、善い方では、特立特行。わるい方では、秩序紊亂。では困るから、社會的思想が出來て來る。權利義務といつて、相犯さず相守る。そ

れでも足りぬから、相互扶助といつて、同情しあふ。だが、まだ、この「我利の一念の捨て難きを如何にせん」だ。「權利」は考へるが「義務」は考へぬ。「力」は得ようと努力する。「職分」は逃れようと努力する。「末法澆季」にちがひない。

慈悲、報恩、回向、俱成。父子、君臣、社會秩序。これがわかれば文化人。片意地と執著と、動物的欲望、動物的闘争、これが原始人。または生半化人(ナマハンカジン)。我等文化人は、動物的闘争を少くしようと努力してをる。彼等は動物たらんと努力奬勵する。生活を戰闘と心得てをる。修羅でなくて何だらう。その修羅の政治を人間世界、文化開けた日本に行はうとするのである。ゆるすべからざる罪惡。

闘争思想を鼓吹し、我儘をゆるす政治など、日本の國にあつてはならぬ。慈悲と平和とだ。自衛の外に、兵を動かした事の無い日本だ。侵略をかつて行つたことのない天孫民族だ。

喧嘩好きの、慘虐な、ひとりよがりの、動物的な、生半化人は、自分ひとりだけを考へる。芽と枝と幹とは、お互にちがつてると思つてる。花と葉と實とは、絶對に差別があると考へてる。肉體と精神とは別だと思つてる。物質文明と精神文明と相異ると叫んでる。文科と理科とは混同してはならぬと考へてゐる。

色心不二である。渾然融和してあるべき「一」である。「全」である。それがわからぬ愚さに、その現れた各方面の一局部を見て、別別の個と考へる。盲人撫象の昔話。昔、數人のめしひが集つて、象といふものは、どんなものだと爭つた。そして各、言ひ張つた。「象は箕の様である。」これは耳をなでた人。「象は箒のやうなもの。」これはその尾を執へたもの。「象は桶の如くである。」これは足をいぢつたのだ。「象は太鼓の胴の様だ。」これは、おなかをおさへたのである。そして、とうとう彼等は、象を知り得ずにしまつた。「全」をわすれて「個」を執する、その愚か人を罵つたのである。

演說を聞きに來て、「演說が見えない」と怒つたといふ話、これはほんとうだ。演說は耳で聽くだけではない、眼も手傳ふのである。いな、からだ全體が聽くのである。芝居を見る、見えさへすればよいのではない。聞えなければ物にならぬ。からだ全體で芝居を見る。私は足の指をわざらつた。足だけではない。體全體がわづらつてるのだ。私は目がわるい。目だけではない。體全體がわ

るいのである。一局部だけのことで、全體には關係がないといふことは、此の世の中にはまづ無いはず。

個と全との考が足りず、芝居は目だけ、音樂は耳だけ。口だけで飯を食ひ、足だけであるいてゐる。これを愚人とも、劣等人ともいふ。この樣な下等人は、宗教と道德とは別だと考へる。宗教は神が作つたもの、道德は人が人をしばるために作つたのだと考へる。

人は萬物の靈長だといふことは、此の上もない卑劣なことばである。自侮自瀆だ。人類の生存權、なんと我儘千萬なことばよ。世界は、人間のためにある。と同時に、他の一切の生物のためにある。人が生存權を主張し得るなら、猫も長虫も、むかでもとんびも、その生存權を主張し得る。「靈長と」いふはきちがへが、世界に慘禍をもたらした。

差別の相に執するから、物の眞に達するを得ず、事の理を觀る能はず。神は自らの外にあると思ふから、迷信になり、神の奴隷で滿足する。道德は他人の加へる制裁と思ふから、踏みはづして法律にしばられる。人と我と同じねうちと考へたら、お互に輕しめあふこともなからうもの。生きものの生きたい心は同じだと考へたら、雞卵をたべるにも、感謝の念はわいてくるはず。

文化日本の雞の聲が、原始蠻人のゆめをさますには、まだ間があるのだらうか。赤白黄色の原始人ども、早く寸心を改めて、修羅道の迷から出て、一佛乘の天日をあふぐがよい。これが自身のためであり、人類のためである。

旅

旅は、
旅は　ほんとに　わすられない。
いにしへの、今の。
木にも　草にも。
さうよ　石も雲も
しみこんでるよ、きづのやうに。

四、第三者

「私」は第一人、「先生」は第二人。先生の御話の中に出て來るものは、すべて「第三者」。當面の私には關係がない。

これが今の教育の狀況。すべて差別觀にとらはれて、のろひとそねみとから、鬪爭のみをこれ熱愛する原始人的歐米諸國の眞似をして、日本の文化を忘れてゐる。だから、無効だと叫ばれ、だから、個人思想、鬪爭思想が横行する。まねたがわるい、忘れたのがわるい。

花が咲いた、木に咲いた。草にさいた。どこから來たのだ。だれかが置いて行つたのか。土から出て來たのか。本來何處にか有つてゐたのか。幹をさいて、枝を切つて、葉をさがしても、花は決して見えはせぬ。活力や生命は、目に見えるものでない。

五瓣、四瓣、十字、唇形。紅、白、黄、紫。その色色の形、色合、本來具有と知らぬゆゑ、神が作つたなどと、嘘をいひ、ごまかしをいふ。內在だとは知りながら、それが、その草全體、木全體の生命のあらはれ、活力のあらはれだと知らぬ人もある。花は木の第三者では有り得ない。その木

全體、草全體の統一調和なしには現はれ得ない。

人間の統一調和に對する內在性から、あらはれて來た宗教であり、道德であり、音樂である。人間個體、或は人類全體、或は、或る組合、或る一地方の、全體の必要から、現れて來ねばならなかつた信仰であつた、道德であつた。それを第三者と考へるのは、根本的のあやまりである。理想は外在ではない。われが作つたものに外ならぬ。純他力は純自力である。いや兩者の合體である。

教育は、第三者を見ることであつてはならぬ。われに內在のものを見ることでなければならぬ。內在のわれを見能はぬ原始人は、すべてのものを第三者とし、自己を土臺にして、自己ひとりに都合よき樣に、批判を加へ、分析的にしらべ出す。その邪智邪見を、珍しがり感心してしまつて、むやみに眞似た結果が、日本の教育の無効となり、日本の文明、日本思想が、滅亡に導かれさうになつた。行詰つた。氣がついた人たちは、驚き騷いで、號令かけた。戻え。戻え。寺小屋へ。人へ。本當に、教育は、日本人を作ることだつた。歐羅巴になることではなかつた。

萬物我に存す。此の道理を忘れたから、何もかも、我には遠い第三者。時には仇敵、時には無關

係者。歐羅巴原始人の單純さ。理科の學者の單純さ。第三者の外的批判は忘れぬが、自己の內在は檢討せぬ。孔子はえらい奴ださうだ。聖人君子といふのださうだ。釋迦はえらい奴ださうだ、ブダといふのださうだ。ルウテルはえらいのださうだ、親鸞はえらいのださうだ。おれには關係のない人たちさ。

己心內在の孔子もなければ、己心內在の釋迦もない。況や、本覺の佛性も生き樣がなく、不息の進修、廣度衆生の心など起き樣はずもなく。向上もなく、發展もない。行詰るはずである。眼前に生き、眼前に死ぬ。良心の聲も聞かなければ、感激などもありやうはずがない。

ただ小利口、ただ生意氣。先生の批評はするが、自分を反省し批評することはない。先生もまたその樣な範を示す。驕慢と懈怠と、束縛と執著と。力には畏れるが德をば顧みない。法はしばるもの、くぐるもの、上面をつくろつて、かけでやぶる。欺瞞と詐僞と、麻雀とトランプ、これが日本の今の教育。

賭博はいけない、馬券はよろしい。投票賣買は法で禁ずる。但し投票しに行く日當は出す。これが日本の今の政治。詭辯と揚足取と、權力と名譽とをむさぼる。これが日本の今の學者（の一部）。

白人赤人の上部の文明だけを見て、まねて、それがそれまでになるために、內に充實してゐた努力と修養とは、てんでかへり見ない。つまり、すべてのものを、第三者としてのみ見る邪見偏見が日本の教育に禍してゐる。

教育をただ職業だけだと考へてゐる先生たち、だから、第三者とのみ扱つて、自分の內心にも入れることが出來ず、他の心に入ることも出來ず、うはべだけ整へば、それでもう滿足してしまつて內部充實には手ををつけぬ。表面だけ體裁よくやることを貴んで、心から人間にならうともせず、ならせようともせぬ。

統一もない、調和もない。花活けや茶の湯やかただけ出來ればよいとする。人まねはするが、氣はのらぬ。氣合がかからぬ。だから、現實を忘れて空想に走る。現實を輕んじ、根柢を棄てて、大空を考へて曠野を走る。かつては、日本の教育は、歐羅巴人を作ることであつた。日本のことを知らぬのを誇りとした。なんと大馬鹿。五十音圖はかけますか。いや、字を、日本字を、滿足にかき得ぬことは、統一のないことの證據である。調和のないことの證據である。音樂などはないでせう。

教育事業は、第三者であつてはならぬ。第三者の小智慧、皮相を見ることではない。「顔や器量には」である。教育は人である、われである。人格である。人格に内在のものを明にするのである。わが内在をみがくのである。即ち天壌無窮の實行である。内容充實である。日本人を作るのである。

市町村の政治に、自治の實行が出來ぬのも、第三者として考へてゐるため、組合も忘れれば、團體もわすれる。自分ばかり考へて、他人との共存共榮を忘れるから、權利ばかり考へて、職責をほんとに考へぬから。國家もなければ政府もない。我利に都合がよければ、政黨はつくる。離合聚散は風次第。市民國民など、考へるひまはない。咄、此無賴漢。日蓮の聲をきけ。「まづ國家を祈りて後に佛法を祈るべし。」國家は斷じて第三者ではない。

第三者としてのみ考へるから、日本の歴史も、日本の文明も、日本の精神思想も、少しもわからぬ。日本を祖國と考へ得ぬ原始人も出來て來る。日本を忘れて、エウロォパだけを考へてる。本當の祖國を忘れてヨソのことばかり考へてる。「人類」もわからなければ、「世界もわからぬ。まして日本帝國の尊さもわからねば、皇國中心主義の大切なこともわからぬ。國民たるつとめもわすれてる。これが、今の教育のまちがつてるためのの結果だ。戻え、戻え、第三者ではない。第一内在だ。われに呼びかけるのは、わが心だ。

今の日本の宗教家も、國家に禍する一つである。歐米の宗教をそのまま宣傳する人の、國家反逆者であることは、いふまでもない。宗教に都合のよい様に國家人類を改造しようといふことは、それはまちがひ、きちがひ、すぢちがひ、國家人類の文化のために、宗教の方を改造して、これを立派なものにするのだ。

神を向ふに於いて、これに近づき、これの奴隷とならんとする宗教、それは、一種の迷信である。排斥すべきである。剿滅すべきである。人間のために、國家のために、國民のために、將來の人類文明のために。

我々は、神である。佛である。信仰は内在である。内在の神を呼びさますのである。極樂は西方十萬億土の安養世界ではない。此の娑婆世界が、即ち寂光淨土なのである。我が居るところ、即ち道場、我が働くところ即ち淨土。此の帝國が即ち極樂淨土である。わが仕事が即ち佛の仕事であ

る。所作（しょさ）（すること）みな佛事である。純他力の信仰が、意味をなすのは、わが内在の理想のあらはれであるからでなければならぬ。

今の宗教家が、國家を除外し、個人靈魂の慰安だけを考へてるのは、失體だ。全と個とをはきちがへてるのだ。他の人間以外で、人間の吉凶禍福を支配するものがあるのだと考へるのは、原始蠻人の事である。祈禱だ、まじないだ。それが人間、家庭、子孫に何になる。文明を阻害し、人心を腐敗させる。自分だけ安心すればそれでよいのか。

國家といふ考へがよくないと考へる氣狂ひもある。これを歐化狂といふのだ。日本は日本の特別な歴史、習慣、信仰がある。何も白人のまねなどする必要はない。日本思想がなぜわるいか。白人に考へられぬからといふか。愚にして度すべからざるものである。日本には、日本思想があるからこそ日本なのである。思想も學問も、白人赤人などとはちがふのである。ちがはねばならぬのである。ごまかされるな。

低劣にして學問なき宣教師ども、勝手な熱を吹きあげて、生きるを最後の目的とし、他國他人の資本をたよりにする。それが宗教といふものであるならば、一日も早くほろぼすべきだ。國は即ち我が國、我が身。神は即ち我に内在の尊きわれ。國家は我と一體である。孔子の生誕は、わが内在の尊きものの生誕である。釋迦の成道は、わが内在の尊きものの成等正覺である。自覺なき信仰、他力のみの信仰は、邪道、邪見である。

さればとて、我と神と一體だと、早呑込にし、執著するならば、即ちこれ魔、即ちこれ墮地獄。花はおのづから花葉はおのづから葉。藥と毒との別を知らねば、色心不二の理もわからず、即身成佛も皆目、知られず、「久修業所得」もわかるまい。釋迦は、娑婆往復八千度。それで修行が積り積つて、やうやう佛陀になつたのだ。即身成佛とは、一切衆生ともろともに、日日夜夜に、つとめはげみ、慰め進み、おのが家業をすることだ。自己のねうち、自己内在の色心のねうちを自覺することだ。

神佛を、第三者と扱つて、それに阿り諛ふが、今の宗教家のあやまりだ。日本の歴史、習慣を打ちこはして、新な宗教を宣傳しようといふことのそれ自體が、抑もあやまり。その日本の歴史、習慣に限つて、物を考へることもせず、第三者の佛をたてたり、吉凶禍福を支配する神を考へたりす

るのは、これは宗教といふものではない。迷信といふものだ。國家の權威を蹂躙する宗教が、もしもあるなら、その存在權は之を拒否すべきだ。我我國民が。

理科の學者は、よく宗教を否定する。それは第三者として扱はれる宗教の筈であるが。時には、内在の宗教までも、まちがつて否定する。かと思ふと、神は光線なりなどと、迷信鼓吹をも敢てする。すべて物を第三者としてのみ扱ふ習慣から、自己の學問、自己の事業が、宗教的價値があるのだとも考へず、まちがつては、低級高級もわからなくなつてしまふ。西洋かぶれの考へ方では、第三者の神の否定がおそろしいのだらう。日本の理學者は、そんなにわからぬはずはない。内在の神の聲をおききなさい。

生半化な非戰論、概念的な非戰論。因緣宿命あきらめの宗教。これらは最も國家國民を誤らせる。他の民族、日本人ならざる他の民族の、奴隷となつたか、それの手先に買取られたか、使嗾されたか、教唆されたか。そんな、手先の宗教、賣物買物の宗教。これは斷然、追ひ斥けるべきだ。

春は花さき、秋は實(コノミ)なる。われらは因緣所成である。因緣所成であるが故に、われみづから因緣

を切りひらき、又因緣を作り、結果を成(ジヤウ)じ得る。第三者たる「神だ」「佛だ」にすがるのではない。内在の「神だ」「佛だ」の、美しき强き力を、更に美しく强くみがきあげるのである。わが力、因緣を作るのである。それで宇宙が圓成する。

國論に統一がない、思想に統一がないと、よく生半化の學者、宗教家はいふ。統一があつてたまるかい。統一される時は、腐る始まり、潰れかけてる時である。色色のものがあればこそ、統一の意味があるのである。「統一」「統一」と統一に執著し、纏縛されて、なんでほんとの統一があらう。そんな統一を考へてる連中は、アダム・イヴの天國で統一しようとしたり、安養淨土で統一しようとする。一所懸命になればなるほど、宗祖の御考とは離れてしまふ。これ人生に必要なき（世に害毒を流す）信仰であるからである。

各宗、各教の祖は、みな、一地方一地方の人間のために働いたのである。その心持を忘れ、人間を忘れ、ひたすら、人間の毒になるやうに、教をときひろめる。何と愚なるまちがひ。宗教は信者を作ることではない。又、信者を作るための道具でもない。社會事業や變に徒黨を組むことは、宗教でもない、信仰でもない、時には、人生を害し、宗教を賊するものでもある。宗教の道具でもな

い。無論その本體でもない。

宗教は、此の國土、此の國家、此の國民個個に、今現に、又將來に、よき結果を與ふべきもの、文化の指導となり、道德の開發となるべきものでなければならぬ。宗教に國際問題など云云するものは、非愛國者、非宗教者である。外國のものそのままの宗教、內國產でも、迷信、邪信、淫祠妖教に等しきもの、みなこれ非宗教、非宗教者である。自己の問題でなくて、第三者の問題だと思つてゐるからである。

宗教は非戰論だ、平等だと單純に考へるから、ばかだといはれる。殺も亦慈悲といふことがある。菩薩が兵箭刀杖を執つて、戰鬪に從事するといふこともある。非理、不法、正しきを知らず、善を知らず、それで押し通さうといふ我儘もの、分りもせぬに判斷を加へようといふものなぞには反省し、悔悟し、將來、その過ちを二びせざらしめむがために、猛烈に、糾彈し叱責し、時にはその命根を斷つべきである。これが大乘教育のつとめの一つである。國際關係などと脅迫して、宗教と政治とを混雜せしめるものは、まづ第一に放逐誅戮せらるべきである。

宗教は第三者ではない。第三者と扱ふのは、大まちがひである。我等の反宗教運動は、まさに此の意味であり、又反宗教運動ででもあるのである。

新佛教徒綱領

我が徒は、佛教の健全なる信仰を根本義とす。
我が徒は、信仰及び道義を振作普及して社會の改善を力む。
我が徒は、宗教の自由討究を主張す。
我が徒は、迷信の剿絕を期す。
我が徒は、從來の宗教的制度及儀式を保持する必要を認めず。
我が徒は、宗教に對する政治上の保護干涉を斥く。

五、選　民

あの山向ふの奴は、油斷が出來ぬ。どうも恐ろしい眼附をしてゐる。何か、おまじなひでもして禍を我等の仲間にかけようとしてゐるらしい。

いや、あの川向ふの奴は、賤しいけだものだ。何かといふと變な目をして、此方(コチラ)ばかりのぞいてゐる。すきをねらつて盗みでもするつもりだらう。

いや、あの藪のあつちの奴は下等だ。劣等だ。髪のゆひ方がちがつてる。高い處へ上つたことが無い。あるき方が蟹の樣だ。鼻がありはせぬ。

いや、鼻がでかくて、眼が光つてる。どうも羽もはえてるらしい。いや、目が一つで、まんなかに竪についてる。口は耳まで裂けてをる。いや、身のたけ一丈、髪は金色で、手が長く、足が三段に折れる。耳は肩へかぶさつてる。

いや、あの森の中のあの下等なけだものに比べれば、實にをかしいほど我等は優越を感ずる。髪は金髪、目の色は黄金、顏は細長く、鼻は高高と中央にたつ。からだは一體に白く、艶々と紅色(ベニ)をおびて居る。

いや、われらの優越を感じることよ。ことばの明るくほがらかなことよ。聲の美しきことよ。顏は圓圓、目は黑目、髪は黑黑と長く地に引く。丈(セ)は高からず低からず、齒は四十枚、白白と雪の如く。鼻は端然と中央に坐する。ああ此の美しさ、他の人族の遠く及ばざるところ。

われには弓あり、棒あり、つるぎあり、石あり。この若者の腕を見よ、山野をかけめぐる脚を見よ。

此の辯舌をきけ、此の聲をきけ。此の文字を見よ。此の智慧を見よ。汝、我に仇するか、此の呪術のおそろしきを知れ。

此の力、此のまなこ、鼻の息の強さを知らぬか。わが頭に光るものが居る。われらを守る尊い神

だ。

わが神は、汝等をこなごなにかみくだくだらう。わが神は此の山の頂上にをる。

わが神は、天にをる。汝等はほろぼされるであらう。大きな眼玉でにらみおろしてをる。

恐れることと威張ることと、屈從と、抗爭と、他の部落はいつも敵である。他人(ヒト)はいつも泥棒である。神は自分たちだけの神。他に仇する神。これが原始時代の部落民の狀況、考へ方である。

個と個と、人と人と、部落と部落と、日日闘爭、夜夜挑戰。そぬみ、にくみ、のろひ。力だ、腕力だ、武力だ。これが原始の狀況である。自分のことだけ考へるから、喧嘩と屈從との外はない。神はかくて、それぞれの一部落民にのみ保護を加へ、他の族を排擊する。だから、その神は、闘爭を好み、嫉妬をたてまへとする。他の神を禮拜することを最も嫌ふのである。

かかる原始の狀態が、今なほ世界のあらゆる場所に存留してゐる。今の日本人が、白人を恐れ、

赤人を拜するのは、原始性の殘つてるためではあるまいか。事事に遠慮し、何もかも買被る。愚かしい原始性といひたくもなる。

白人は、「自分ひとりがえらいもので、特に神から選ばれて、特なる恩寵に浴してゐるのだ、道德を見よ、文明を見よ、」といふ。「我等によりてのみ、世界は輝く、汝等は必ず服從せよ」といふ。「世界とはエウロオパなり」。

赤人はまた、「自分たちは、神から特に選ばれて、將來世界を統一すべき運命を持つてをる。神を恐れぬ者に禍あらむ」などいふ。「我等のみ人である。他はみな獸類である。われらはほしいままにしてよい」といふ。「彼等の有する財産は、我等の所有たるべし、その生命の如きは、これを奪ふも、罪にあらず」。

だから、白赤の爭は起る。猛烈に行はれる。爭闘は神の意志で、殘虐に暴戾に行はれる。だからたまらない。闘爭は原始蠻の狀態である。白赤人が爭闘を好むのは、その選民の思想からで、その選民の思想といふのは、原始蒙昧時代の蠻風醜俗の遺物である。

これら原始的蠻風醜俗を、何故捨て得ぬのか、捨てもせぬのみならず、却つてこれを珍重し保存するのは、何としたわけ。それが實に人といふ動物の悲しさである。さもしい神の根性である。

自分ばかりを考へて、人をかまはぬ我儘から、他の人族は、ただ自分たちのためにあるのだと考へる。花を見れば神が自分に與へたものと思ひ、木に實がなればおのれのものと考へる。鳥がをれば神が與へた食物だとする。水に魚がをれば、神の恩寵と奪ひあふ。これは犬猫の考へだ。

魚は生きんがため、自分の種のために働いてる。鳥は食はれるために來たものではない。木の實は木のためにみのり、花は花自身の必要から咲く。他に利用されるはずもなく、他を利用し得べきはずもない。

力あり、又小利口なる人間の我儘が、あんなひねくれた考方をし、あんな勝手なことをしあふ。萬物の靈長だの、神の創造だのと、勝手に氣狂のやうなことをいひあふ。選民思想のあるところ、個の衝突、族と族と、種と種との衝突、國と國とがなぐりあふのは、已むを得ない次第ではある。

御覽なさい、二千年來、赤と白との猛烈な爭ひ、殘虐な殺しあひ、その暴戾、その慘酷、とても我々のまともに見ることの出來ぬことをやりあふ。そして、それを快しとする。お互に加へあつた迫害は、いかに陰險で、いかに野獸的であつたか。嫉視と仇怨と、犬と猫、蛇と蛙。黑人のつるしぎり、松葉いぶし。やつと二千年のしかへしをしたと悅ぶ國、更に手强く苦めてやると隱忍する國。何と恐しきけだものの如き人類よ。

北歐諸國の神を蹂躙し、絶滅せしめ、又はその神話を、陰險慘酷な方法で踏潰し、その文明を潰亂させたのは、どんな種族であつたか、どんな宗教の信奉者であつたか。どんな神さまであつたか。彼等はほんとにわるかつたのか。彼等の神話、宗教、風俗習慣は、そんなにまでも下等であつたか。はた、それが彼等を導く唯一同情ある仕方であつたか。「その通り」と答へ得るものが、果してあるか。

人類を下劣ならしめ、人類文明をふみにじり、戰禍と毒害とを人類に與へるものは、この選民思想に越したものはない。

この選民思想に、おどかされ、ごまかされ、かひかぶりほれこんで、星を見てあるいて、どぶへ落ちる日本人もあるのだから、原始動物性は悲しいもの。

此等選民のいふことは、いつも詭辯とこぢつけだ。神についても、德についても。

神の膝下に行つて奴隷になるのでありながら、女子の人格を尊重するといふ。ほんとに尊重するのなら、どうして奴隷になれなどといはれやう。

人類のためだといふ。そのくせ、黑ん坊や黃色ん坊はいぢめ放題、虐殺も自由。「人間ならざる動物を殺して見たところで、少しも問題ではない」といふ。

すぐと世界的だといふ。世界といつても、鳥獸、蟲、魚、草木、石瓦、水も空氣も含まない。いな、他の人族をさへ除外する。つまり自分たちの仲間のをるところ、ゆききする處だけをいふのである。なんと褊狹なる世界よ。

世界的、世界文明、世界史、すべてかくの如きの褊狹。世界史に對して東洋史あり、東洋史に對して日本史のあることをいへば、それで十分。はづべき「世界的」よ。

日本は、白人のおかげで文明が進んだといふ。氣をつけろ、今進んだといつてるのは、日本內地に於ける白人文明が進んで來たので、もとからあつた尊い日本文明は、神代以來の日本文明、日本精神は、かなりうまく、いぢめられ、衰亡に瀕してるるのではないか。

世界の勞働者結合せよといふと、自分たちに呼びかけてるるのだと、うぬぼれ日本人は、早合點の大悅び、彼等いはく、「貴樣たち人間のつもりか、世界以外のものではないか。」「でも、よい、手先になれ」。何をよろこぶぞ、たわけめ。

白赤人の猛烈な鬪爭、この神神の憎惡嫉妬、暴虐、歷史的な野蠻性を見て取つた黃色い人。われこそ神の意志を受繼いだもの、天の寵命われにあり、わが五千年の歷史を見よ。その深淵な學問を見よ。その節度ある政治を見よ。汝等お互に相殺せよと、見せびらかし、おどかしたので、驚いた

のは、目だれかうの白人、赤人。恐るべき獅子は眼を覺したと、目を見張る。ペコペコする。

おもしろいぞ、「四海兄弟」の衝突だ。「神の子」の衝突だ。「人類愛」の衝突だ。四海とは自分の領土、神とは自分たちだけを守るもの。人類とは自分たちの仲間だけ。なるほど、衝突するのは尤も。

黄色人の文明、道德、宗教、その人種の活躍、昔は立派なものであつたさうだ。今は衰へ切つてゐる。否、或は亡びてゐる。その衰朽した民族精神が、白人たちに刺戟されて、部局的に興奮した。衰へ果てた人間の興奮は、ただ動物的になるばかり。

空威張、詐僞、欺瞞、不信、暴戾、我儘の仕放題。白人は、上には上があると驚いたか。五千年來の、形骸ばかりなる道德、學問、宗教、それが自他に害を與へるだけで、生命のたしには少しもならぬ。

中華だ、中國だと威張りながら、なぜ、學問道德の中心には觸れ得ぬのか。なぜ、文明の中核には觸れぬのか。皮相文明の白人のまね。それで國が榮えるか。嘘をついて喧嘩をさせて、夷を以て夷が制し得ると思ふのか。仲間喧嘩で日もこれ足らず、それで何處の夷に制せられるつもりか。あらず、分割、離散の日を待つのか。

選ばれた民のはかなさよ。選ばれた民のあはれさよ。三惡道にさまよつて、廣い天地を見得ないで、永劫のほろびに急ぐものよ。空は青く、日はかがやくのを仰ぎなさい。

日本は我が朝鮮を奪つたとやら、我が琉球を取つたとやら、我が臺灣を取つたとやら、我が滿洲を奪はんとすとやら。この出放題。それでますます首をしめる。中華には、人類に共通なるべき歴史も宗教も德義も、滅びてしまつてゐるのだ。

とはいふものの、それぞれの民族には、それぞれ特色のある文明、宗教、道德があり、そして又特色ある考へかたを有つてをる。そして、それが又、それぞれ相當ねうちのあるものでもあらうことを忘れてはならぬ。

東海の島國といはれ、大平洋の片隅に、蕞然と小さく立つてゐる島、これが大日本帝國である。日出づる處の邦である。

色色の民族の漂著したであらう處だが、天より下つたといはれてる一民族、理想的政治を行はうと、理想的結合を以て一族主從渡つたところ。德を主にして力を事とせず、秩序だつたる東洋風。皇室中心の考が、すべてをうまく取りまかなひ、すべての他民族をみな一民族に結合した。

古い同胞朝鮮から、支那から、蒙古から、傳へた教は、今も殘る。孔子老子のまことの精神は、今もかがやいて殘つてる。印度の釋迦の尊い教、今も、立派に光つてる。四海兄弟の本當の意味、人類愛の眞の意義、只此の國に光つてる。「一切衆生、悉是吾子。」「艸木國土、悉皆成佛。」四海兄弟どころではない。人類だけの、(一民族だけの人類)ためではない。慈悲は無限だ。

今又、白人赤人の長所を取入れて、全世界の文明を、新も舊も、白も赤も黃も、みな取り入れてこれを人類のため、一切の世界のため、(白い世界をも、赤い世界をも含む)全宇宙のために、新しく立派に創造しつつあるのである。

直覺と批判と、調和と統一と、攝收と消化とを立派にやつた國、個と全との關係をよく保つてる國。毛嫌ひと、うぬぼれと、選民思想の早く無くなつた國。堂堂と本當のねうちを發揮して卑屈にへこたれなかつた國。爭鬪を好まぬ國、平和にみちた國。全世界の中心にたち、新なる文明、新なる宇宙の生命を創造しつつある國。天使、指導者、南無大導師。

南無大導師、全世界を導く力の强さ。兵器科學、戰術、兵學、たれか日本に及び得る。理科の學問、電氣に於いて、力學に於いて、工學に於いて、數學に於いて、世界の大立物を後(シリヘ)に見る。文科に於いては、彼等の知り得ぬ(彼等の知識の程度では到底了解し得ざる所の)佛教哲學、支那哲學。古くして又新しい藝術、文學、(詩)。音樂。それらから出て來た大和魂。武士道精神。祖先崇拜。皇室中心。

此等すべては、非常にすぐれたものであり、從つて、その國家の意味、元首の意味、社會の組織道德の意味、宗教の意味、何から何まで、全然諸外國民族の考へ方行き方とはちがつてる。尊い日本、尊い文明。

明治大帝の「教育に關する勅語」の精神。この精神が、世界民人の指導となり得ないといふならば、その信仰となり得ないといふならば、世界はけだものの世界である。「古今に通じてあやまらず中外に施してもとらず」。世界中の人民が、まことに尤もと仰ぐはずである。

仰いで實行する時に、それらの國民のねうちはあがる。力をすてて徳を行ふことだから。降參せよといふのでない。屈從せよといふのでない。おのおのお互に尊重しろ。おのおの己が力を致し、誠に進めといふのである。その特色を失はず、相妨げず相守れ。人間全體を共存共榮の中に置け。日に新に、日に進み、自彊息まざる、これがつとめ。

どうして、戰爭が出來やうか。どうして、他の際などねらはれやう。しかけられれば詮方なし。正義を守つてやるだけやる。「正しき道理に從つて」ただそれだけのことである。

正義、人道、平和、博愛、平等、自由、只、日本に於いてのみ言ひ得る。外でいふのは、或る限定、或る特相を有つてゐて、本當の意味では使はれてない。平等は黒人を待遇せず。人道は黄色人

の虐待を欣んでゐる。平等を尊んだ國は、差別の慘酷になやまされてゐる。絶對自由を叫んだ國は、いま、絶對束縛に喘いでゐる。

日本はただ「正語」を使ひ得る。それは選民の思想がないからだ。人種の差別待遇が無いからだ。選民思想が無いわけは、四種姓の差別を認めぬ佛教の影響で。それで、秩序がみだれぬのは、平等即差別がわかつてをるからである。正直の頭に神が宿るから。

神はある民族を護つて、他の民族に害を與へるものではない、一切の民族、民族個個の内心に、光りかがやくものである。第三者でもない、第二者でもない。ただ、内在の尊貴なもの、これが神であり、佛である。人格に爭鬪はありえない。日本の神や佛様は、喧嘩をよろこぶものでない。

内在の神の心がある故に、お互、尊貴なる人格者。到る處が「即是道場」。到る處が、即常寂光土。此の考を人類みなが知る時に、此に極樂が此の世に現ずる。事實として現はれる。

「我が身は即ち佛なり」佛なりですましてはをられぬ。お互に、不斷の修行。更に努力すること

は、「淨佛國土、成就衆生。」日日の向上、日日の進修、これが人間のつとめである。

「佛に汚れなし」。その汚れを取り去るのが第一最初のつとめである。汚れを取つて、みがきをかける。みがきとは、學問修行（書をよむだけではない）のことである。驕慢懈怠を去ることである。「遊戯神通」ともいふのだから、藝術文學も妨げない。ないのではない、これ亦「讃佛乘の緣ぞかし。」「歌唄頌佛德」音樂は人格の內容を立派にする。

選民の思想を取り除き、第三者としての神を捨て、一切萬有に普汎、內在の神の光りを拜し、共に佛土を作らんとの大願を立て、その責任職分を遂行努力するのが、われらのつとめ。日本のつとめ。宇宙の淨化。世界の指導。それだ。これが即ち、「一天四海。皆歸妙法。末法萬年。廣宣流布。」

世界と共に、世界一切の生き物と共に、天晴地明の理に位し、寂光淨土の樂を享受しよう。此の指導が事實に出來るもの、日本の外、日本人の外にはありはせぬ。

日本よ、つとめよ。日本人よ、つとめよ。その責任、その使命の重大なことに自覺して、勇猛精

進、終不退轉。努力。努力。

御　願

一、「君が代」の歌を、遊戯又は遊藝的に唱歌、演出、又は放逸するものが、地方にはまだあるさうであるが、是は、やめて貰ひたい。各國の國歌と共にやる場合は、已を得ないが、此の場合、敬粛の意を失はぬ樣にして貰ひたい。自他の國家に對して御無禮なことである。

一、四大節及び地久節は、必ず祝賀式を行はれたい。各家庭に於いても行つて頂きたいのではあるが、今は主として、中等以上の各學校、（高等學校大學も）必ずやつて頂きたいと御願ひするのである。その際、必ずそれぞれの節日の唱歌を、會衆一同で合唱すること。已むを得ぬ場合には歌隊を編成すること。その歌ひ方は、中略を行はずに、必ず首尾全部を歌ひ通すこと。「中略」は實に失體であり、罪惡である。

一、國旗をたてることを勵行して貰ひたい。縱橫寸法、丸の位置、その寸法、竿との關係、金球との關係など已に規定があるのである。幟の樣に「チ」をつけたり、球と旗との間を空けたり、普通の軒先で直立させたり、交叉させたりするのは、皆違式である。違式にならぬ樣にすること。又、國旗及び軍旗に對しては、敬意を表する樣に習慣づけられたきこと。

一、今、日本は世界の中心にたつた。どうすればよいか。

一、全世界の指導者としての責任と覺悟とについて、十分、かつ早急に、御考慮をまとめおかれたき事。

一、宇宙のため、人類のため、新文明の樹立に十分の努力を盡されたきこと。

右御願ひする。

蜜蜂の仲間では、その務めを果さないで歸つて來ると、風紀係が之を刺し殺すといふことである。つとめを果さぬ人人が、なんと平氣でゐることよ。

はたらかぬ、何も仕事をせぬ人は、だれか制裁せにやならぬ。なまけものは退治ねばならぬ。なまけ根性は滅さねばならぬ。今は、あそんで居る時機ではない。口先だけでは無駄である。青年が議論に浮身をやつすなど、實に亡國の現象である。ミッシリ實行に精出すのだ。

なまけ根性なくすために、まづ第一に、學校、官衙、銀行、會社の日曜廢止。たばこ禁止。酒禁止。勿論、麻雀、トランプ、皆禁止。歐羅巴になることを禁止。歐羅巴の眞似をすること斷然禁止。勤勞精神、實現のためである。

麥でも、稻でも、木でも茶葉でも、いや、人のいのちでも、病氣でも、日曜休止はあり得ない。地球の運行も休まない。なまけ根性が休みたがる。休んで得のいくためしはない。休むのは、氣息と一緒のこと。

漢の時代は、官吏に對して五日一休。御機嫌取りがしくじつて、なまけがふえて仕方がない。そこで十日に一休み。唐の時代はさうだつた。九日驅馳して一日閑。日本は一日(朔)、十五日(望)、(廿八日は、休んだり休まなかつたり)神參り、殿樣、先生の御機嫌伺ひに罷出る。全くの休ではなかつたか。

日曜を考へたり、夏休み冬休を克明に休みくらし、休みあかす樣のことでは、日本の維持はむづかしからう。本當の職分はつくせまい。

勤勞、勤勞。勤勞が人生。勤勞が宇宙の實狀。勤勞は我等の宗教である。茄子に無駄花は無い。蘭は休まず茂る。草刈が刈つても又茂る。フリジアは、人が見てゐなくても、かをつてる。はたらいてゐる人は、丈夫なものだ。勤勞は我等の職責。

○

世の中は、統一調和と秩序とで持つ。おのが職責を十分正確に盡すところの細胞個個の努力によつて、益立派に進んでゆく。その細胞の我儘となまけと、本來の職分を忘れることによつて、世の中は、墮落する。(權利のみ主張するのは、それである。)

此の事を現實に示すものに、音樂がある。音樂は、諧調と秩序と、個個の音がその本分を盡すので成りたつ。これが、どの位、人間を美しくするか知れない。

善い音樂は、人格を善くし、美しくし、又その力を強くする。惡い音樂は、人を墮落させ、惡化させ、劣化させ、又はその人格を壞滅せしめる。

音樂は、宗教であり、道德であり、教育であり、政治である。音樂は何かのためにではない。利用されるものであつてはならぬ。それ自體が、價値あるものである。それで、他方、すべてのものの根柢となるものである。教育の根柢、人格の根柢。繪畫、彫刻の根柢。詩歌、藝術の根柢。

だから、學校でも、家庭でも、社會でも、政治でも、宗教でも、その根柢に音樂をおかねばならぬ。音樂のあるところ、不調和、無秩序は、無いはずである。

植物の、花と枝とは、必ず、形に於いても、色彩に於いても、大なる調和と大なる秩序とがある。よく氣をつけるなら、有毒植物には、觸れるはずがない。

音樂とは、舶來音樂、西洋音樂、ジャズ音樂、外來そのままをいふのではない。さういふ音樂の根柢的原理をいふのである。內在の音樂である。器樂は下等なもので、手がかかり、金がかかるものである。我我の樂器は、咽喉である。聲帶である。鼻である、口である。肺である。氣息である。それから出る音樂は歌である。民族精神である。

音樂の心得ある人は、喧嘩などはしなからう。無秩序、非禮、非儀はしなからう。

しかし、低級下劣な音樂は、人を爭はせ、人を怒らせ、人を墮落させ、人を自殺せしめるものである。であるから、我等は、眞の意味の音樂を盛んにしなければならぬ。人格尊重と同じ意味で音樂を尊重すべきである。

○

我等は日本人なるが故に、日本のことばをつかひ、日本の歌をうたひ、日本のこころにならなければならぬ。

年月の記載も、年號干支を用ゐないなら、神武天皇即位紀元を用ゐるべきだ。ヤソ生誕紀元なぞは、學術、商取引の外に、用ゐてはならぬことである。これは、國民の一つの義務である。その國民たる以上は、その國の正朔曆日を用ゐなければならぬはずである。昔は、曆は國の獨立を表すものであつたのである。日本は、エウロォパではない、エウロォパは世界全體ではない。

我我は、日本の紀元を用ゐなければならぬ。我我は、日本のことばを親愛し尊重する。そして强く、美しく、明なものにせなければならぬ。人類世界、何處へ行つても、日本語で用が足りる樣にならなければならぬ。日本語の樣な美しいことばを使はせなければならぬ。

我我は、神代以來の、我が風俗習慣、歷史、文明を親愛し尊重し、これ繼承傳存せしめんがために、又エウロォパの原始蠻族と化せざらんがために、もつと、十分、漢文、漢字、漢學に親まなければならぬ。

大日本に、咲き出た花、色も美しい、香も美しい、形もかがやく。實もかがやく。空は靑く、海は廣廣、太陽が光りかがやくから。

絶えざる進歩、絶えざる向上、花が咲いて實がなつて、幹がふとり、枝葉が茂る。鳥が來て囀り牛馬が來て休む。路行く人のしるしででもあれば、旅ゆく人のなつかしい宿りででもある。雨にも風にも、なほ健かに、なほ　聳えよ。

我等の日の丸

星は光つても　月にや及ばぬ
月は輝いても　日にはかなはぬ
朝日のかがやき　照り照る下に
我等の行くては　光りにみちてる。

國はせまいけど　海は廣いぞ
涙はよりくるくる　空はすみすむ

たふとい文明　たふとい歴史
我等の日の丸　おし立てはたらけ。

神代このかたの　日本だ　我等だ
今じや世界の中心　人のみちびき
おやより傳へた　信仰　力
天地に命を　みたせろ　與へろ。

林　古溪編著目録

增補第一版	平仄字典	丙午社出版 定價一圓八十錢
增補作詩關門		丙午社出版 定價一圓八十錢
わかうた千首一		丙午社出版 定價二圓
わかうた千首二		古溪歌會出版 定價二圓五十錢
詩集祖國祖敎		古溪歌會出版 定價二圓
詩集ふるさと		古溪歌會出版 定價一圓
古溪小篇第一 ハナシコトバ	十七條憲法	古溪歌會發行 定價十二錢
同第二	わたしはだれ	古溪歌會發行 定價十二錢
同第三	天壤無窮	古溪歌會發行 定價十二錢
同第四	歌の本道	古溪歌會發行 定價十五錢
月刊雜誌	我が歌	古溪歌會發行 一部二十錢

◇これは、大晦日の夜、例の守夜中の執筆から四日頃までに大體脱稿して、あとは、手入のために、十五六日かかつた。

◇八幡濱の村田吉右衛門氏、大坂の津田宗保氏その他、激勵聲援してくれた澤山の人たちのおかげで、本編はまとまつたのであある。

◇編輯及校正は例の通り穴山孝道が致しました。

昭和七年二月廿四日印刷
昭和七年二月廿六日發行　〔定價十五錢〕

編輯兼發行人　林　竹次郎
印刷人　山名貞雄
東京市本郷區駒込蓬莱町三
印刷所　盛明舍
東京市外瀧野川町田端一〇五
發行所　古溪歌會
振替口座東京七五九五三

終